

# 『人間の罪』

酒井一途

「チツソは私であった」という言葉を聞いたとき戦慄した。聞いてはならない言葉を聞いたと思った。なぜならこの闇に立ち向かえば、二度と安逸には生きられないだろうことが直感的に分かったからである。そしてまた同時に、聞いてしまった以上は立ち向かわないわけにはいかないと僕の内心の声が告げていた。

チツソとは水俣病を引き起こした企業名である。そしてこの「チツソは私であった」との言葉を公に発言した緒方正人氏は、他でもない水俣病に罹患した被害者の一人だった。彼は当初、水俣病認定を求める患者運動の協議会会長を務めていた。そんな被害者の声の代表とも言える方が、「私もまたもう一人のチツソであった」「自分の中にもチツソがいる」と言つて会長の座を退き、協議会を辞め、水俣病認定の申請を引き下げたのである。

それまで水俣病は僕にとって何ら意味を持たぬ言葉だった。中学やら高校の社会科の授業で習った公害としての病という知識しかなかった。当事者意識の有無どころの話ではない。それはとうの昔に過ぎ去った過去として認識していた。試験用紙の穴埋めのために暗記する歴史教科の一問にすぎなかった。机を並べていた大多数の同期による認識もおそらく大差ないだろう。そうとしか受け取ることのできない記述で教科書には書かれていたと記憶しているし、今も引き続いている問題などとは到底知りえないことだった。

現状を聞いた今となって僕は赤面する。認識を違えていた自分に、教わった知識を疑いもなく受け入れていた自分に恥を感じる。同時代を生きている以上、意識していようがしていまいがどうしたって誰もが当事者なのだ。その現実からは逃れられない。

しかし正直なところを言つて、水俣病という問題そのものは未だ僕の意識からは遠い。おそらくそう簡単に意識しはじめられるものでもあるまい。それでいてこのことの本質的問題は僕の中にしっかり植えつけられたと感じた。そしてその本質はどこまでも深くつづく闇だった。重大なのは事の本質であり、すべて根源において問題は繋がりが合っている。これは「人間の罪」の問題なのである。

そもそも「チツソは私であった」とは何を意味する言葉なのだろうか。緒方氏はある日自身に問う。もし自分がチツソや行政の中にいたなら、やはり彼らと同じことをしていたのではないか。すると問いを否定できない自分があることに気付く。そしてこう考える。

それはつまり自分の中にもチツソがいるということなのだ、と。水俣病事件史は他でもない「自分自身」を問う問題であったと彼は導きだす。

一九六三年にイェール大学で行われたアイヒマンテストと呼ばれる実験がある。ナチス政権の下、数百万の人々を強制収容所へと輸送する責任者であったアドルフ・アイヒマンが、どのような心理状況で権威の指示に従っていたかを明らかとする目的の実験である。実験内容の詳細は省くが、結果としてはごく平凡な一般人であっても、権威ある者からの命令に接すると、その命令がいかに不合理なものであっても、多くの場合自らの良心から来る葛藤やストレスを放棄して命令に服従してしまうことを示していた。緒方氏が考えた問いは、この実験に従えば誰しもに当てはまることであると言える。

緒方氏は言う。「この事件（水俣病）は人間の罪であり、その本質的責任は人間の存在にある。そしてこの責任が発生したのは、『人が人を人と思わなくなった時だ』と。

この「人が人を人と思わなくなった時」がどれほど多く世の中にあるだろう。ありふれている。言うまでもないナチスによる大量虐殺がそうだ。あるいは個人対個人であっても構わない。殺人などと大それた事件にまで至らなくとも、日常生活の中でほんの一瞬、些細なことで人が人を人と思わなくなる時は生じる。そしてその一瞬は萌芽なのだ。相手の人権を無視しその存在の尊厳を踏みこむような行為をすることになる、まさに「人間の罪」の芽が顔を出す時が「その時」だ。「その時」は誰にでも訪れるし、誰もが他人事では済まされない。

そう考えたとき、問題は僕の身に降りかかり根を生やした。僕はごく身近な友人の顔を幾人か頭に思い浮かべた。そしてその友人たちの過去を思った。僕にはわかりえない、知りえない闇のことを。その時はっと気付いた。人間の罪。そのすべては他でもない僕自身の中にある問題なのだ。僕の友人たちの背負った過去の、あらゆる責任が僕の内にもまた内在しているのだと。ある人の内に嘆かわしい過去があり、現在という時間をこの僕が生きている。それだけで人は罪を背負わなければならないものなのだ。自分が今ここに存在する、ただそれだけで人間の罪は現前しうる。「チツソは私であった」とは、そういうことを言っている言葉なのだ。

何もかもが他人事ではない。紛れもない当事者性を伴って目の前に表れる。この世に生を受けたものすべて、すべてこの世の問題の当事者性から逃れることはできないのだ。なにかもが関わりあっているのだ。全は一、一は全を一個の人間に当てはめたならば、そういうことが言えてしまう。それは重すぎる。一人の人間が背負うには重すぎる罪だ。

そこで「神」という概念が生み出されたのではないかと考えた。あらゆる人間の罪を一身に引き受けて背負うことは、一人の人間だけで立ち向かっても敵わない。だからその犠牲を代わりに請け負うものとして、一神教における「神」という概念が生まれたのではないか。たとえばキリスト教においては、受難を生きた一個の人間であったイエス・キリストを「神」として仕立て上げ、彼一人に贖罪させることにしたのではないか。

そうして象徴と化した「キリスト／神」は概念上を生きており肉体を持たず、それでいて全は一、一は全を体现することのできる存在である。「キリスト／神」は人間の罪を背負い、人は「キリスト／神」に祈りを捧げるようになった。人間のため犠牲となった者への祈りとして。そして人は、せめて自分自身の罪だけは自覚的に背負おうと誓いを立て、「キリスト／神」に告解し懺悔しはじめた。他の人間はともかく、自分だけは善く生きようと思つたのかもしれない。

極端なことを言えば、つまり「神」というのはある種の制度なのだ。人が生きていくために編みだされた非常に巧妙な、人間が作り出した仕組みなのである。「神」は本来人が背負わなければならない人間の罪を代わりに背負っている。だからこそ偉大であり、祈りを捧げなければならない。

しかし「神」に罪を背負わせている以上、人はその罪の重さを知ることはない。

だとすれば、われわれは宗教上の「神」を手放すところから始めなければならない。そして一人でも多くの人が意識的に人間の罪を背負い始めなければならない。そうすることでしか、人は本質的に人間の罪を知りえない。

アンドレ・ジツド曰く、「人間の終局目的は、神の問題を少しずつ人間の問題に置き換えるにある」と。あるいはライナー・マリア・リルケ曰く、「いつまでもキリスト、キリスト、と言わずに、僕らはもうじかに『神』にむかわねばなりません。僕らが僕ら自身を『神』へ持つてゆく」と。あるいはフリードリヒ・ニーチェ曰く、「君たちが一つの神を創造することができらるだろうか。答えは否である。——だから、どんな神についても語ることはやめるがいい。しかし君たちは超人を創造することはできらるだろう」と。

まったくもってその通りだと思う。すべての人間の罪は、「神」に背負わせる形で紀元前の頃から明らかとなっている。あらゆる問いは出し尽くされている。あとはその問いを人間たちでどう処理するのかと言うことだ。

やるべきことは見えている。「神」の存在を弱らせ、われわれがそこへ移行していけばいい。人間が作り出し、都合のいい形で利用してきた「神」は本来神であってはならない実

在した一個の人間である。キリストも仏陀もムハンマドも人間だ。おそらく本来的な神とは、プロティノスの言う「一なるもの」なのだ。トルストイの言う、以下の文章が指し示すものなのだ。

浮世の生活だけに終始するなら、私は神無しにも済まされる。が、生まれ落ちた時自分は一体どこから持ち来たらされたものであるか、また死後にはどこへ消えて行くのかという事に、ひとたび思いを潜めると同時に、私は最早、自分が死後にその膝下へ帰って行く自分のほんとうの生みの母が、何ものであるかを認識せずにはいられない。自分はこの世へ自分にとって不可解な「何物か」から分かれて来たのだ、そして再び自分にとって不可解なこの何ものかの膝下へ帰って行くのだ、という事を認識せずにはいられない。

自分の真の母であり、自分が死後に再びその膝下へ帰って行くところの、自分にとって不可解なこの「何物か」を、私は神と呼ぶ。

さて、特定の宗教への信仰を持たぬ人が大多数である日本での、より身近な事例は何だろうか。日本では誰に罪を背負わせているか。その対象は非常に曖昧である。「神」が仕組まれたのとはまた別の手口による巧妙さが窺える。

考えるに、日本における最大の罪の背負い手は共同体にある。個人が責任を問われづらい環境を作り出す、実体の見えない「組織」という名の共同体。一つの対象に責任を負わせて贖罪させる文化のなかった日本では、こうして責任を分化させ、どこに責任があるのかの判断をつかなくさせ、靄の中に問題を放りこんでしまうという手段を取った。

モーリス・ブランショは『明かしえぬ共同体』の中で、民衆を指してこう語っている。「人びとは、無数の人を集会させたその同じ必然性によって散って行った」「民衆は彼らを固定化するような諸もろの構造を無視するのだ。現前と不在とは、混合されるものではないとしても少なくとも実質的に入れ替わり合う」故に、「民衆を把握することはできない」

これはまさに共同体にしても同じことが言える。人と人が集まる場所、固定化された構造は意味をなさない。「組織」という外枠は幻想だ。それは実体がなく触れることができない靄のようなものだ。そして内枠の中にいる人々は、集い現前しては次の瞬間に不在化する。罪の在処は捉えられない。「組織」という幻想のどこから罪が発生したのかもわからなければ、どこに責任を負わせるべきかも判断が付かない。

制度としての「神」然り、実体がないということは責任を転嫁する上で重要なファクターとなる。それでいて「組織」を構成するのは実在する個々の人間たちなのである。そこには人がいて、生活を営んでいる。共同体は容易に潰すことができない。潰してしまつたら、その「組織」を構成する多くの人々、またその家族が路頭に迷う結果を生み出すことになるからだ。

だから仮に責任を負う一人が「組織」のトップに立つ。彼はいわば共同体の「象徴」である。その一人が切腹するなり辞任するなりして、「組織」の代わりにすべての責任を背負う。それこそ昭和天皇が、太平洋戦争を指して「すべての責任は朕にある」と言ったように。しかし往々にして、実質的には罪はその一人にあるわけではなく、共同体そのものや共同体を構成する人々によって生み出された罪なのだ。そして「象徴」が一度消えたら責任は分散され、またふたたび次なる「象徴」を作り出して「組織」そのものは生き延びていく。

多少形は異なるが、これまで見てきたような一神教における「神」の下に生きる文化圏の人々にも同じことが言える。彼らは宗教を習慣とし、宗教を生活としている。そこから脱することは宗教を捨てることを意味する。両者の大きな違いは、「神」は死ぬことがなく辞任もしない点である。僕には、作り出した「象徴」としての永遠の生命を持つ「神」に贖罪させることで、人々が人間の罪を放り投げ、「神」の犠牲下に安住してきたように感じられてならない。あるいはそのためにこそ教会や教団という「組織」が作られたのかもしれない。「神」に祈りを捧げる共同体を生み出すことで「神」の制度を補強し、人間が懷疑しはじめないように。すべて人間の罪を、人間から解放する目的で行われてきたのだ。

しかしそろそろ、人間の罪を「神」や「組織」に投げ出している場合ではなくなくなってきている。科学の発展により、人間の罪が一時的な悲劇を生み出すに収まらず、その後半永久的に後世まで引き継がれるような、地球生命そのものに関わる問題となつてきているからである。

未来を生きる人間が、現代を生きる人間たちのために背負うことになる罪は、たった今もあちこちから噴出してきている。冒頭に上げた水俣病の問題も引き続いていて。東日本大震災によって露呈した原子力発電所の問題も、第九条をめぐる憲法改正の問題も目下進行中であり、日々絶えることのない「人が人を人と思わなくなった時」が引き起こす事件の数々もそうだ。ほとんどの人々はそれらの人間の罪を身に負えず放棄しようと、あるいは見てみぬ振りをしようとしている。

考えはじめたら安逸には生きられない。背負いはじめた罪は二度とは降ろすことはできない。それでも立ち向かわなければならぬ闇がある。未だ僕には遠い水俣病も、友人たちの悲しみを作り出した原因も、等しく人間の罪であり見つめつけなければならぬ。たとえ自らの身が打ち滅ぼされようとも、やはりそこから始めるより他にはないのだ。

水俣に生き、水俣病を克明に書き続けた石牟礼道子はこのように言っている。「水俣の患者さんに『何に対して祈られますか』ってお尋ねしてみると、『人間の罪に対して祈る』とおっしゃるんですよ。『我が身の罪に対して、人間の罪に対して祈ります、毎日。』」

われわれが今こそ祈りを捧げるべきは「神」に対してではない。人間の罪に向かって共に真正面から立ち上がる一人ひとりの人間に対してである。そうしていつかすべての人がすべての人間の罪を自覚的に背負うことを意識したときに、はじめて人間の罪はこの世から浄化され、人間はより高次の存在として生きられるようになるのだと信じる。

〈了〉